

ジャンスタロバンスキー『ソシュールのアナグラム』、金沢忠信 訳、水声社、2006

■ 第 1 章 反復の心がけ

言語（ラング）と言説（ディスクール）とは何かこの二つの関係性について、時々発話（パロール）も引き合いに出しながら、ニーベルンゲンの伝説をもとに研究が行われた。その中で頭韻の反響（エコー）や音の反復などの法則を発見する。

言語と言説の後には用語法が続く、これ以降に頻出する語、およびソシュール自身まできちんと差別化や分類が出来ていないものも多くみられる。以降でよく使われるものとしては、アナグラム、アナフォニー、イポグラムの三つがある。アナグラムは詩の中で音節の反復が完全に行われているものであり、アナフォニーは不完全だがある程度の反復が行われているもの、イポグラムはこの時点ではアナグラムの一種とされているが暗示や複製の意味合いを含むものとしている。

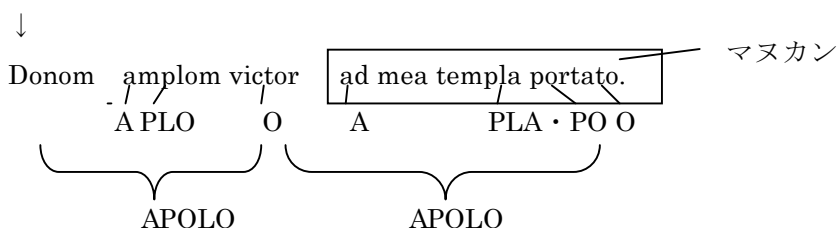
■ 第 2 章 二重音とマヌカン

一章後半の中で出てきた音の反復を経て、ソシュールは更にマヌカンの研究に入る。マヌカンとは、テーマ語の先頭および末尾の文字を持つ語群のことで、マヌカンの前後にはアナグラム、イポグラムが存在し、それらの指標ともなっている。

アナグラムとイポグラムの識別を単音と複音によって導いており、その例は以下のようになる。

Donum amplum victor ad mea templa portate.

(勝利の暁には、私の神殿にたくさんの供物を持ってきなさい)



このようにして出てくる音が単音（「a」等）の散在だとアナグラム  
複音（「po」等）で徹底されているとイポグラムとなる

(詩部分 丸山圭三郎著 「ソシュールの思想」 P173 より引用)

■ 第 3 章 起源の問題

ソシュールはここまで導き出された事象が詩作の永遠の秘密として、全ての時代に確認されうることを断言出来ればよかったのだが、この時点ではアナグラムの法則の中にはまだ不明な点もあり、＜テーマ語＞を経なければならぬということは分かっていた。これらから、アナグラムの法則が - それが確証されるとしての話だが - 詩作の作業を容易にす

る性質のものではないということをソシュールは認識した最初した。以降三章ではいくつかの詩、テキストから〈テーマ語〉、イボグラムを読み取っており、ほぼすべてのテキストに、〈テーマ語〉またはマヌカンが確認できている。

#### ■ 第 4 章 増殖

セネカの戯曲を考察するに当たり、セネカの中においてソシュールが遭遇したイボグラムは完璧だった。それに促されてソシュールは「断定的な注記」を書く。「断定的注記」の中では、ラテン詩はロゴグラムありの方法で作られるということ、また、キケローや彼と同じ時代の人にとってはイボグラムの中で詩を作る以外の書き方はなかった、ということが言われている。

その次にソシュールが取り組んだのがキケロー研究である。キケロー研究からソシュールは「断定的主張」を書いており、内容としては、書簡の機会や主題、こういったものすべてはイボグラムの真に厳格な規則性に影響を及ぼしていないということ、またこうした習慣はペンを執るローマ人すべてにとっては、取るに足らない言葉を伝えるための二次的な性質のものであったと述べている。ここから、イボグラムはローマ人にとっては当然のものであり、使うとしても取るに足らない言葉を使う際に使うものであったという考察がなされた。

前述の考察からさらにいくつかの問いを導き出したソシュールは、ウァレリウス・マクシムスの散文研究に付された注意書きの中でさらに考察を深め、イボグラムは比較的容易であり、はじめから息づいていて、ペンを執るすべてのラテン人にとってもごく普通に随伴にするものではないかとした。

#### ■ 第 5 章 証明の継続

ソシュールはいままでテキストから、様々なアナグラムやイボグラムを導き出しているが、ソシュール自身はアナグラムというものは存在しないのだと、誰かが示してくれても満足である、としている。しかし、そうはいつても、ここまで研究してきて、ソシュールはアナグラムがそのつど常に設定・確証可能であることを導き出しており、また、アナグラムがどこに端を発しているかを知ることは大きな利益になると言っている。

ソシュールのこれらの研究はソシュールが詩を言語学者、音声学として読むと決めたから出てきたものであり、もし見かたが違っていたならまた別な結論が出ていたと思われる、とスタロバンスキーは語っている。そして、残りの課題は、いままでソシュールが求めたものたちが詩人たちによって意識的に守られる規則に値するかどうかの証言を得られるかどうかであった。しかし、それに当たるものは中々出てこなかったため、ソシュールは、「隠密な伝統」や「堅く守られる秘密」といった仮説としか、または自明過ぎるものとしかということが出来なかった。

この後、アナグラムに対する諸所の問い・異論・反響と否定的面とウェルギリウスから、アナグラムのこの種の伝統の力は計りしれないということ、アナグラムは困難なものではなく、また、枠組みまたは基盤とされるアナグラムの諸断片の上で詩作の作業は開始されるということを述べている。

ここまでは、ソシュールがいままで研究してきたことと、それに対しての個人や外部からの疑問をもとに答と問いを重ねている。しかし返すたびにアナグラムに関しては固まってくどころか、新たな問いが出てきてしまっている状態であった。

そして、下の部分がソシュールの最終思考状態である。

1. 最古から最後期に至るまでのラテン詩はかたときも絶え間なく、詩行を構成する語の選択に際し、アナグラムの構想の上で（私がイポグラフと呼ぶ特別な形式のもと）進行していた。（p 163）

以降も続くが、上を記載した「カルミナ・エピグラフィカ」のためにあてられたノートのうちの1冊、「結論」とかかれたノートには以降の記述にかんして意味深長な中断が見られる。ソシュールが中断を余儀なくされたのは、ソシュールが多くのラテン詩作者を調べて導き出したアナグラム等の規則に関して、外的な証言が得られていないためである。まるで隠しているかのように暗示の1つさえもないのである。スタロバンスキーも、この部分に関しては「自由に告白、明示され規定されなかったはずの制作の手法を、たとえそれが義務であるにしても、隠す理由はあるのだろうか？（p 165）」と、疑問を投げかけている。

アナグラム等の今までの研究に対して確信を深めながらも、決定的な確証を得られていなかったソシュールは遂に、「外的証拠」つまりは現代におけるラテン詩作法の実践家、ジョヴァンニ・パスコリからの証言を得ようと試みた。一度目の返信はある程度好意的で、ソシュールは思い切って長めの内容を送ったが、それに対して返信は返ってこなかった。これを否認の印として受け取り、アナグラムの探求はぷつぷつ途絶えてしまった。

ここまでのソシュールの全研究の中に暗示されている結論をスタロバンスキーは、「作品中の諸々の語は先行する他の語に由来するのであり、形成しようとする意識によって直接選択されるのではない。」（p 185）とまとめた。

#### ➤ スタロバンスキー考察

ソシュールの唯一の誤りは「偶然の結果」と「意識的手法」の二者択一を、かくも明確に設定してしまったことである。意識も偶然も放逐して、純粹に偶然でもなく完全に意識的でもない過程<sup>プロセス</sup>という様相をみていけば、また違った結果があったのではないか。

#### ➤ 個人考察

ソシュールはアナグラムやイポグラムをいったこれらの規則はほぼ確実なものであるとまで、一部では発言しているのに、何故たった一通の手紙の返信でこれらの多岐にわたる研究が途中で終わることになってしまったのが個人的に一番引っかけた。確かに状況も状況だったかもしれないが、他の人物にもだしてみれば変わったのではないかとも思った。また、このアナグラムなどがただの偶然なのか、きちんとした発見なのかという線引きは、確固たる証拠もなかったため、ソシュール本人も確信を深めながらも危うさを残した、危ないものだったのではないかとおもった。また、個人的にはp 153の「ひとは自分が探し求めているものしか見出さないものだ」という言葉、注釈の「人は望むことを喜んで信じる」という2

つの言葉が印象に残りました。ソーシャルはうまく自分の探し求めていたものが見いだせないまま打ち切らざるを得なかったのだろうかとも感じました。

参考文献

丸山圭三郎『ソーシャルの思想』、岩波書店 1981 年

丸山圭三郎『ソーシャル小辞典』、大修館書店 1985 年